花卉研的学生生活

千葉大学大学院園芸学研究科　花卉園芸学研究室所属　博士後期課程３年
松　原　紀　嘉

植物無知の知

ここ数年、花卉研究室にやってくる学生（私も含めて）は、ほとんど植物の名前を知らない。おそらく普通の大学生であれば、植物の名前など、気にもとめずに過ごすのであろう。私が花卉研に所属してまず初めに取り組んだのは、植物の名前を覚えることであった。植物の名前を覚えることは、これから花産業人を目指す学生にとって、人の名前を覚えるのと同じくらい重要である。人と人とが相手のことを知るときには、誰でも必ず相手の名前を最初に覚えるだろう。名前を覚えることでコミュニケーションがとれ、相手を理解できる。植物と付き合うのもそれと同じである。植物の名前を知らずに、花産業人になろうなんてかなり無鉄砲である。

私は、樹木や球根植物、それからランなど、どれを見てもみんな同じに見えていたほど、植物に対して無知だった。しかし、興味の無かった植物も、名前を覚えると、不思議なことに、興味と愛着が湧いてくる。ここまで来ると植物の思う壺、どんどん植物の世界に引き寄せられていく。こんな私の植物無知の知のきっかけが、花葉会主催花産業必修1000属検定であった。もしこれに出会っていなければ、私や花卉研の学生は、全く植物を知らずに、花産業に飛び出していこうとしたことであろう。

合い言葉は『フィールドからDNAまで』

花卉研と言えば南米調査だ、という好奇心で、南米ブラジルとアルゼンチンの自生地調査に参加した。南米では見たことも無い植物とその絶景に、ただ感動するばかりだった。食生活も私の大好物ステーキと、乾いた喉を潤すキルメスビール、教授がアルチューハイマー気味になってしまうのも納得である。日本の花屋に売られている植物が何気なく雑草として生えているのを見ると、やはり感動する。ある程度、植物の名前を覚えてから行ったことが、そのときに大変役立った。合い言葉の「フィールド」は、この自生地調査の意味だけではない。採集してきた植物を研究圃場で栽培、評価することも含む。植物を知らない花卉研の学生は、もちろん栽培など未知の領域である。花卉研では植物を知っていようが知るまいがそんなのおかまい無しに、学生一人あたり温室１棟（約30～60坪）を任される。最初は種子播きから始まり、鉢上げ、除草、薬散、温室修理などなど、農家との違いと言えば出荷が無いくらいであろうか。学生だけど休みがない、そう、毎日灌水もしなければならない。栽培無知の学生も一年もすれば、栽培のノウハウに自信が持てるようになる。

南米の『フィールドから』、ペチュニア発見！

日本の『フィールドから』、灌水中

ここまで出来て花卉研の学生は、まだスタートラインに立ったにすぎない。「フィールドから」漸く、次の目的地である「DNAまで」のスタートが切れる。学生は、またまた未知のDNAの世界へ飛び込まなければならない。

近年、花卉研は、花の色と形、自家不和合性などについて、遺伝子レベルで研究している。花卉研の研究対象は主にペチュニアである。ペチュニア属は現在20種ほどの野生種が発見されており、また一般に出回っている品種も色や形など多種多様である。ペチュニア品種はもとを辿れば、種間雑種からの起源、つまりその歴史が始まったとされる。花卉研のもう一つの研究として、このペチュニア品種の歴史に、DNAを使って迫ろうとしている。品種の起源となった野生種を特定するのはもちろん、その起源種が南米のどこの村から持ち出されたのか、とかいうところまで特定しようと試みている。

日本の小さな研究室は、地球のちょうど裏にあたる南米のペチュニアの歴史を垣間見ようとしている。日本人の花文化レベルがどんどんあがる中、花の品種の歴史をDNAで綴るのも、花産業発展の一役につながるのではないだろうか。DNAも使い方によっては、逆に「DNAからフィールドまで」を辿れる、そんな日もそう遠くはない。また、昨年からマイクロアレイという強力な実験手法も取り入れ、更に遺伝子の研究も加速している。学生も、年々増える園芸植物の種類、フィールドワーク、それから加速するDNAについていくのに必死である。

実験室の中の『DNAまで』